
海辺の家

ボン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海辺の家

【Nコード】

N0820E

【作者名】

ボン

【あらすじ】

本当にこんな事件のような事が身近に起きていた頃、私は毎日感動していた。海辺を歩くと泣きそうになった事もあった。「人生」というものを学んだ。「これまでの20年間」の生き方を少し後悔した。一人でも多くの人に「色々な生き方があるんだよ」と教えてあげたくなった。そんな日常の、たわいのない会話と出来事。

く **T a m a r a m a h o u s e** く (前書き)

この本を読み終わった頃、あなたはお金を貯め始めて、飛行機の手ケットを買い、旅に出てる事を願います。

〔T a m a r a h o u s e 〕

私は21歳だった。この本の中では私は「ひかる」という名前にしておく。

これは、隅から隅まで、本当にあった話。自分はまるで映画の中に暮らしているような、毎日

が事件とロマンにあふれていた日々の海辺での出来事である。

ある朝、目が覚めると同居人たちがいつもより興奮気味で騒いでいた。

「イスが天井に突き刺さってるんだって・・・ベットさかさまで、壁もつき抜かれてるって・・・ひかる、一緒に見に行こう！」

そう誘ってきたのは同じ部屋に住んでいるスペイン人の女の子。

噂どおり、下の階に住んでいたアイルランド人5人組みはやらかしてくれた。

テレビは家のベランダから下に投げ落とし粉々になっていた。

昨日まで人が住む「家」だったとは思えない、悲惨な光景。

壁は全てはがされて、つきぬかれて、何部屋あったのか分からない。

天井にはイスの足がささっていて、ちょっと美術館のよう。

昨日のみ散らかしたまま、夜中に彼らは去っていった。

ちなみに下の階、ウチ、隣は同じ大家さん。みんなに嫌われていたイスラエル人の大家。

私は彼の事は嫌いじゃなかった。彼も私の事はすごく気に入っていた。だからこの下の階に

起きた事を見て、少し同情した。

その数日後、隣の家はもっと悲惨な事になった。

壁は、バーベキューソース、からし、ケチャップを満遍なくふりまかれ、色とりどりになって

いた。足元にはつながったままのソーセイジなどの生ゴミが山になっていた。

家中がおった。

下の階の場合とは違って、とにかくどこもかしこも「ぬるぬる」にされていた。

もちろん、犯人は隣に住んでいて、出て行った奴らだ。

私はその頃、オーストラリアに住んでいた。シドニーの海辺。

キッチンから見えるのはとても高い位置にある海。

晴れている日は「真っ青」としか表現できない「真っ青」な海。

曇っている日はグレーで、キッチンでは

「なんなんだこのクソ天気!!」

と怒りくるったイタリア人の同居人が片手を空に向けて振り回し暴言を吐く。

私たちはそのころ確か、8人でその海辺の家をシェアしていた。

8人といっても、いつも8人だったわけではないし、いつも同じメンバーの8人だったわけで

もない。私がそこに8ヶ月住んでいた間、何人がいれかわっただろう・・・

思い出すと本当にきりが無い。何しろ、1ヶ月もいない人もいれば、ウチに住んでいないくせ

に毎日ウチにいる奴もいた。ドアにはめったに鍵をかけず、ドアに鍵が万が一かかっていた

場合は、キッチンの窓を開けてよじ登って中に入ることができた。

部屋は3つ。3人の男部屋、2人の男部屋、3人の女部屋があった。お風呂とトイレは一緒に、

1つしかなかった。誰かがシャワーを浴びている時はもちろんトイレは我慢しなければいけない

い。冷蔵庫は1台。8人分の食料が入っている。気がつくとな誰かに自分の分の食料が食べられて

しまうのなんか日常茶飯事。新しく牛乳を買っても、夕方には誰かに飲まれて半分になってい

る事もしばしばあった。

冷蔵庫の後ろには小さいゴキブリがいっぱいいて、時々外にでてる。

食器を洗わないで山積みになるまでほったらかす人も中にはいた。

それで大喧嘩になり、怒ったイタリア人が窓から皿を投げた事もあった。もちろんその皿は

割れた。

そんな、「完璧」とはいえない家に8ヶ月も住む事になるとは、入居した時には想像もつかな

かった。毎日最低8人、最高多分50人くらいいるよううるさくて汚い家。

でもそこから離れられなくなり、そして離れなきやいけなくなった。

第二話

そもそも、この家に引越す事にしたのは、「お金がない」からだ
った。

綺麗な家に住みたいとか、海辺の家に住みたい、一人部屋に住みた
い、そんな当たり前の条件

でそこその家に住んでいたら、家賃ばかりかかってしまって「と
りあえずここに住んでお金を浮かせよう・・・」と選んだのだ。
あの頃は確か、ちゃんとしたバイトもしていなかった。

条件は本当に最悪だったかもしれない。まず、男との相部屋だった。
あまり綺麗好きとはいえない、むしろちょっと汚らしいメキシコ人
25、26歳の、口ひげをはやした男。

その頃は、スウェーデン人とイスラエル人のカップルで1部屋に住
んでいた女の子と私が、唯一の女だった。彼女は喜んでくれた。

「この家男ばかりだから、ひかるが来てくれて本当にうれしいわ」
そう言って、お茶を入れてくれた。

よく2人で紅茶やコーヒーを飲みながら色々な話をした。

ごはんも一緒に食べたりした。このカップルは何年もかけて世界を
旅していた。

どこから来て、どこに行ったのかはよく覚えていない。

確か、タイに何ヶ月か行った話しは聞いた。オーストラリアには、
多分1年近くいたんじゃないかと思う。二人で仕事をして、お金を
貯めて、また次の旅行に備える。

結局帰る場所があったのかすらはっきりしない。

何しろ彼はイスラエル人、彼女はスウェーデン人、旅が終わった後、

一体どこで暮らす予定だったのだろう。
多分本人たちも決めてなかったはずだ。

最初は同じ部屋に眠るメキシコ人はすごく優しかった。イギリス人のほぼアル中の男と仲が良く、アボリジニが演奏に使う楽器（直径7、8センチの太くて、1、5メートルくらいあると思われる筒型の楽器）とギターを弾いたり、詩のパートに私まで加えさせられて、楽しかった。

皆で少しほろ酔いになり、メキシコ人の同居人は調子によってキスをしようとしてきた。

「やめて」と逃げると、

「君はいつも俺に微笑みかけていたじゃないか。まるで俺の事が好きのようにふるまっていた。それでキスしようとすると思ってるなんて、気違い日本人だ！！（Crazy Japanese！！！！）」

と気違い扱いされ、それ以来犬猿の仲になった。

しばらくすると、他にも女の子がこの家に来る事になり、そのメキシコ人は隣の男部屋に追いやられた。アル中のイギリス人が確かニューヨークランドに行くと言って行く事になったかだ。

同じ部屋に来たのはスウェーデン人の女の子。タイに5ヶ月もいて、旅の続きでオーストラリアにいた。

決して綺麗とはいえない私たちの部屋に、彼女は大満足していた。

「タイには直径4、5センチのゴキブリが部屋中に何十匹もいたの。

それに比べたらこの部屋はとても増しだし、ゴキブリも沢山いると
案外見慣れるのよ」

金髪で細くて確かまだ20歳の、可愛らしい子がそんな汚いところに5ヶ月も住んでいてゴキブリなんか怖くないという。

突然、ドアをノックされた。

「誰？」とのぞくと、そこには背の高い、服装がボロボロの、ドレ
ッドヘアーを腰くらいまでのばした、ヒッピー系の男がいた。

まるで自分の家かのように（彼いわくそこは自分の家でもあった）

「ごめん、俺前ここに住んでて、俺のトランクをベッドのしたに置
いておいたんだ。旅行から帰って来た」

そういつて私のベッドの下にあった赤いトランクを取りに来た。

彼とはそれから、末永く、パリや、ロンドンや、イタリアのアチコ
チでお世話になる事になるとは、その時は思いもよらなかった。

次の日、見知らぬ男がまるで自分の家かのようにリビングのソファ
ーにでっかく腰掛け、テレ

ビを見ていた。

うちには見知らぬ人がよく出入りするから、いちいち「誰？」とか
「よろしく」とかいふ

挨拶をしようとも思わなかったが、すぐく人懐っこいその男は、昨日のドレッドの男だと

後で気づく。髪をドレッドのまま短髪にしていた。

その頃から、この家での生活はただ汚い家での節約生活から、青春時代というフィルターを

通して世界を見ているような、輝かしい生活となる。

誰にも言った事はないけど、私はきつとこのドレッドヘアの男に恋をしていた。

その頃は彼とどうにかなりたいと、願っていた。名前はマッシモ。

彼とは今でも仲が良く、私にとっては親友だ。私たちはとても気があった。彼と出会って多分もう4年以上になる。

同じベットで寝た事も1週間くらいある。彼の実家イタリアで何週間もお世話になった事もある。

出会った日から、今でも、親友以外の何者にもなった事はない。むしろ、私の父のようであり、兄のようであった。

わかっていても、心のどこかで「友達以上になってみたい」という思いが少し沸くことがある。彼ほど信用できる友達は家族や親戚以外は多分いないだろう。

マッシモは私が家に帰って来ると毎日ソファに腰をかけてテレビを見ていた。

まるで自分の家のように。そう、彼いわくここは彼の家で、私のベツトは彼のベツトだった。

彼は隣にの家に住み始め、この家のどこかのベツトがあいたら、それは真っ先に彼のベツトに

なるらしい。そう大家にお願いしてあるのだ。

彼はとにかくこの家が好きだった。特にこのリビングが。

こうして、私の家には彼がいつもいて、私もたまに隣の家に遊びに行くようになる。

甘い生活

マツシモが隣に引越してきてから、私は家に帰るのがとにかく楽しみで仕方なかった。

彼が家にいないと、退屈した。

何もする事がない日は、家に住む何人かと皆で、海辺から歩いて5分くらいにある、カフェに「チェス」をしに行ったりした。

そのカフェの店員の女性は、驚くほど背が高く、無愛想だけど、とても一目を引く素敵な人だったので、いつも見とれた。多分身長は180センチ以上あっただろう。

赤っぽい金髪で、いつもロングスカートをはいて、のそのそと歩く。

絶対あわてたり、急いだりしなそうな仕草だ。多分このカフェのオーナーなのかもしれない。

中古の本が下から天井まで、「壁」という「壁」は全て中古の本が敷き詰められていた。

古びた木のテーブルとイスに座って、いつまでもその中古の本を読んでいるといい、図書館のようなカフェ。

気に入った本があったら買っても良い。

席は多分15席〜20席くらいあっただろうか。私は暇な時や勉強したい時は一人でそこに行き、チャイティーを飲みながら英語の勉強をした。

人懐っこいオーストラリア人がたまに話しかけてくる。

中のテーブルの2つくらいが、巨大なチェス台になっていた。チェスのこまも巨大。

そこに一緒に住むイタリア人やスウェーデン人の子と行ってチェスで遊んだり、自分たちの将来なんかの話をしたりした。

あんなカフェが日本にもあったら、毎日通いたい・・・海辺のにおいがする古本屋。

週末、隣に住むマツシモは、黒く海で焼いて、体格も悪くはなくムキムキした体で、たまにケーキを焼いてくれた。

生まれて初めて男にケーキを焼いてもらったから驚いて感激した。彼は週末はいつも家にいた。皆で海に行こうと窓から誘ってきたり、夜飲みに行く予定をみんなで立てたり。

今思えばなぜ彼は週末ケーキなんか焼いてくれてたのか。

あの頃は「イタリア人の男って本当にドルチェ（甘い）んだなあ」なんて思っていたけど、

実際の彼は料理もそんなに上手ではないし、私が甘い物が好きで、甘い物ばかり食べているといつも私をしかった。親でもなくせに。

週末になると彼に「今日はケーキないの？」とあの頃は勇気を出し

て話しかけていた。

彼と話すのがまだ恥ずかしかった頃だ。

彼がリビングにいた時は、いつも彼の言動が気になってしかたなかった。

彼の念願どおり、うちのベットが一つあいたから、彼が隣からうちに引っ越してきた。

隣にいても、毎日うちのリビングにいたから、特に何も変わらない日々。

ただ土日はいつも彼がお風呂を掃除したりする意外と綺麗好きな人だという事が判明した。

これもまた不思議だった。彼の髪の毛はナチュラルなドレッド。

つまり「髪をとかさないで、あまり洗わないからドレッドになった」髪だ。

初めて聞いた時は彼が私をからかっているんだと思った。

無知は私は彼をあまり知らない頃聞いた。

「年に何回くらい美容室行くの？その髪の毛保つのに。いくらかかるの？」

彼は顔が「はぁ？」と言いたげだった。

「俺は美容室なんて行かないよ。この髪はナチュラルだ。髪の毛をとかすのが面倒臭くて、ある日とかすのをやめてみたんだ。そしたらこうなった。」

彼の事をいつまでも信じないで、他のイタリア人のシェアメイトに聞いてみた。

「マッシモの髪の毛、本人はナチュラルだって言うけど、嘘だよね？美容室でやったんだよね？」

ジャコモという1つ年下のお坊ちやまが答えた。

「美容室！？彼の髪はただ汚いからああなったんだよ」

.....

そんな彼が週末はお風呂磨きをするのだ。

人間って一緒に住んでみないと分からない事が山ほどある。

その頃から「他人と家を共有する事の貴重さ」をしみじみ感じ始めた。

人間って面白いんだ。

イベント

スーパーに食料品を買いに行く。

一見地味な日常だけど、あの海辺の家ではそれも楽しいイベントの一つだった。

「今からスーパー行きたい人——」と、「この指止まれ——」のような集合をマツシモがかける。私はもちろん行く。たいして買わなきやいけないものがなくても、それはすごく楽しい行為なのだ。

スーパ―に行くという事は。

まずマッシモが中古で買ったボロッボロの車に4, 5人で行くのが日常。

たいていはイタリア人の男3人＋私で行っていた。彼らの好きな
オアシスのCDをかけて、大声で歌う。まるでアメリカ映画に出て
くるドライブシーンだ。

車の窓から外を見て、私たちの隣の家に住んでいるマルコが働いている八百屋をのぞく。

マルコが働いている。

「まるこーーーーーーーーーーー」と車からよんでみて気がついたら車を止めてちよっとおしゃべりしたりする。

マルコはちよつと不思議な男のような気がする。背が高く金髪の青い目。歩く時に体重を左右にかけてのしのしあるくから、ちよつとサルっぽい歩き方。あまりプレイボーイとかのタイプには見えない

が、女友達が多いというか、女の子にとっても優しい。
彼とは結構アチコチで遊んだ。

日本にも来たし、イタリアでも空港まで迎えに来てくれたり、実家にお昼をご馳走になりに行ったり。マッシモとはちなみに犬猿の仲だ。会えば話をするがすぐ喧嘩になる。

彼は私たちとスーパーに来ることはまずない。職場が八百屋だって事もあるが、一体何を食べていたんだろう・・・いつも八百屋で働いてそこで食べていたんだろうか・・・

大きなスーパーに到着。駐車することがまず大イベントだ。

ただ駐車するだけなのに、イタリア人が集まると「ここはあーだこーだ」となかなか決まらない上に、駐車料金を払うか無断駐車するかを話し合ったりもめたり。

私は車の事も駐車のことわからないからただ黙ってちょこんと車に乗って、車が止まるのを待つ。

スーパーでは一人一つショッピングカーを持つ。大男たちの買い物が始まった。沢山食べる人たちだから一回に買う食べ物の量も半端じゃない。

必ず買うパスタと、パスタ用のトマトの缶詰。食パン。イタリア人は皆決まって同じメーカーのパスタを買う事にあの頃は驚いた。青い袋のパスタ。

マッシモは皆で食べるためのアップルパイとかをいつも買ってくれた。

一人ひとりレジに並んで買い物を終えると、一人だいたい4袋は持っている。

イタリア人はあの頃からもう「エコ袋」を持つのが週間になっていて、背中に皆リュックをしょい、その中に食料を入れて、さらに袋が4袋だ。

みんなでゾロゾロと、大きな袋を抱えて車に戻る。家に帰る。

食料品を買いに行くのがこんなに楽しかった日々が他にあっただろうか・・・

こんな日はたいてい皆で夕飯を食べる。

アンドレアが皆にパスタを作ってくれる。材料は皆少しずつ出し合ったりして。

アンドレアはいつも仕事がなく、お金がなかった。その分時間が有り余っているからいつも料理をしてくれた。私のお昼や夕飯を作ってくれた。

あの頃は「イタリア人の男は皆料理してくれるんだ。素晴らしい男たちだ」なんて感動してた。実際は皆が皆そうでもないのは言うまでもないけど、南イタリアの男は結構料理がうまいらしい。

アンドレアは北のコモ出身だが・・・

でも実際料理してくれる男で仕事がないのと、仕事していて料理してくれないのでは、はっきりいって後者を選ぶタイプが多いだろう

う・・・アンドレアは、一緒にいると、ちょっとした事であせってしまう自分がちっぽけに思えるくらい「屈託がない」。

だいたい仕事をしないで「来週の家賃が払えるから来週までに仕事を見つければいい」なんて、毎日ノンビリ過ごす「ノンビリ屋なのだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0820e/>

海辺の家

2010年12月24日14時23分発行